

良心と責任

陳野 守正

小谷純一先生は、良心について繰り返して「聖霊」誌に述べてこられた。

「神様は、神を信じる者にも信じない者にも、良心を与えておられる」

「人間は神から自由意志と良心が与えられている。しかし、神に反逆し神から離反している人間は、自己を神として、自己中心に生きるしかない」

満州移民に対する責任の取り方も、良心に基づいてなされていると考えられる。したがって、責任の取り方は同一とは限らない。その点を四人の事例からみてみたい。

野村満夫（仮名） 夫婦とも満州二世。

穀物の仲買商をやっていたのでチチハルよりも更に奥地に住んでいた。野村は、開拓団、現地人の別なく商売を続けていたため、奥地の現地民たちの信用が高く、ソ連軍が侵攻して来たとき、現地民に助けられて無事帰宅できた。その夜、夫は妻に話した。

「奥地にはまだ多くの開拓移民が残されている。それも全部が老幼婦女子ばかりだ。自分は奥地に今一度入って、その人たちを助けてあげたい。お前は子どもたちを連れてハルビンに行くように」

「私一人では出来ません」

「奥地からここに辿りつくまでのあの惨

状は、目を覆いたくなる情景だ。自分が行くことでどれほどの人が助かるか分からない。自分たちがここまでやってこれたのは、開拓団のおかげではないか……」

妻は末の子を失い二人の子を連れて引き揚げたが、夫は帰国することはなかった。

村井長八郎 無教会キリスト者村井長正の父村井長八郎は、戦前、水戸営林署長時代、東海村付近を中心に松の砂防林造成工事を担当していた。

長八郎は石黒忠篤（敗戦時の農商大臣）

と親交があり、後に、内原の満蒙開拓青少年義勇軍訓練所所長となる加藤完治とは友人であった。三人はスクラムを組み、国策満州移民事業の推進に協力することとなり、長八郎は訓練所建設に全面協力した。

「父は石黒忠篤の意を受け内原満蒙開拓団教育機関に協力しました。敗戦の色濃くなるや、父の懊悩は極度に達し昭和二十年六月には割腹責任をとる決意が窺えました。上司から、短刀類一切は身辺から遠ざけるよう父の疎開先に急報せよ、との勧告を受け、私はそれに従いました。内原訓練所創設当時、よもや斯かる事態に遭遇するとは父の予期せざりし所でありましたけれども責任回避は不可との決意は私も承知して居りました」（村井長正から筆者への私信）

石黒忠篤 追放解除直後の一九五一年、改進黨総裁に就任を懇請された時、こうい

って固辞した。

「わしはかつて満蒙開拓に賛成し、沢山の同胞を大陸に送りこんだ。彼らの多くがかの地で鬼哭、荒野の土と化しているのを思う時、いまなお眠れぬ夜がある——わしは晴れがましいポストにつくべきではない、と考える。これからも戦前、戦中の反省を忘れぬようにしたい」

加藤完治 満蒙開拓移民送出の最先頭に立ち、軍と協力、青少年義勇軍として子どもたちまで送り出した訓練所所長加藤完治は、敗戦を迎えつぎのように述べている。

「多くの人を満州で亡くしてしまつたことが分かつて、僕は一時は坊さんになつて全国を行脚して、亡き同志達の冥福を祈ろうかと思つたり、いつそ死んで責任を償おうかと思つたりして、だいぶんもがいていたのだが、しかしよく考えてみると、そういうつもりで開拓を始めたわけではもちろんないのだし、これまでやって来た開拓が間違つていないことが分かつたものだから死ぬこともやめたし、坊さんになることもやめて終生鋏をとることを決心した」

内原に加藤完治を訪ねた武田清子（国際基督教大学教授）に対し加藤は、「——自分は誠意のありつたけをもつてやったことであり、何ら後悔をしていない」と語つた。武田清子は、「——良心の傷みの不在は驚くばかりであった」と述べている。

陳野守正さんは無教会派のキリスト者。出典を記す氏の手紙に拠れば野村満夫（仮名）は堀切辰一著『布がかたる戦争』から。が、本にはこの名はなく、わかりやすく仮名にしたとのこと。村井長八郎については息子の長正氏から陳野氏への手紙。長正氏は、現天皇の学習院初等科1年生の教育係、以降東宮侍従を務められた方。石黒忠篤氏は、朝日新聞社説。加藤完治は加藤の全集第5巻、武田清子の発言は『土着と宗教』から。（大類注）